

【コメント】

片平 幸 KATAHIRA Miyuki

桃山学院大学

渡辺俊夫先生のご報告は、欧米における日本の伝統工芸と美術の受容を明らかにするという観点から、ジョサイア・コンドルの日本庭園論を考察したものである。渡辺先生は、精神性や歴史性に対するコンドルの関心の低さに着目し、コンドルの日本庭園論には、文化的側面とデザイン性を切り離すという特徴があるとまとめられた。その特徴は、構図やモチーフといった具体的なデザイン性から歴史性や文化性などの「ローカルなディテール」を取り払うという点において、イギリスにおけるジャポニスムにみられる「日本観」にも通じているという。さらに、19世紀のイギリスにおける日本美術の受容と照合しつつコンドルの日本庭園論を読み解くことを、日本の伝統工芸を再考する契機として示された。

また、建築学ではジョサイア・コンドルの功績が検討されている一方で、かれの庭園論の重要性が認識されてこなかったという渡辺先生の指摘は、大変に意義深い。この点に関連して、渡辺先生は、明治時代に庭園が「美術の一派」としてみなされていたにも関わらず、それ以降、日本の美術史研究において庭園は十分に関心が注がれてこなかったという問題も提起された。これらの点については、筆者自身も欧米と日本の交流史的な観点からコンドルの日本庭園論を考察してきたが、まったく同感である。

これらの諸点を通じて、日本近代の庭園史におけるコンドルの庭園論の位置づけについて筆者は理解を共有していることが確認できた。問題意識を共有しているからこそであるが、いくつかの点について、別の見方や疑問点を示していきたい。具体的には、渡辺先生が示された(1)コンドルの著作における図版の偏り、(2)コンドルの庭園論の本質として挙げられた三つの要素、そして(3)コンドルが日本庭園の史的・文化的要素をないがしろにしているという見解の三点について、それぞれコメントを述べていく。

(1) 図版の偏りについて

コンドルの *Landscape Gardening in Japan* には、今日では日本の代表的な「名園」とみなされている庭園の写真、特に京都の庭園の写真が少ない。この点について、渡辺先生は次のような解釈を示された。それは、コンドルが庭園論を執筆した明治時代には今日とは異なる日本庭園に関する「常識」が存在しており、それが反映されたというものである。つまり、龍安寺のような石庭や桂離宮のような王朝風の庭を「名園」とみなす価値観は、重森三玲や森蘊といった昭和期の庭園研究者によって見出され構築されたのであり、それを基盤に今日の日本庭園観が成立しているという。コンドルが庭園論を著した明治時代にはこれとは別に、江戸の大名庭園を評価するという価値体系が存在しており、それがコンドルの庭園論に反映されたと渡辺先生は論じられた。この渡辺先生の解釈について、近世の資料を基にいくつかの指摘をしておきたい。

江戸時代に出版された秋里籬島の『都林泉名勝図絵』(1799)には、桂離宮はないが、龍安寺や南禅寺などの京都の寺院庭園は記載されている。つまり、秋里の『都林泉名勝図絵』をみると、これらの京都の寺院庭園は江戸時代から「名園」として位置づけられており、昭和期以前に価値が見出されていなかったという解釈は史実に沿っているとは言い難い。確かに、渡辺先生が述べられたように、重森三玲と森蘊は、昭和期に石庭や王朝風の庭園の価値を活発に論じており、それが今日の庭園観にまで影響を与えていることは認められる。また、重森や森のように、庭園の歴史的・思想的な価値、なかでも禅との関連性や日本の特性についての議論が江戸期の秋里の著作には不在であったことは事実である。だが、重森と森は、庭園の価値を思想化あるいは概念化したという点において、言葉によって「名園」を再発見したとはいっても、彼らの出現以前の明治時代に龍安寺の石庭が「名園」とみなされていなかった、あるいはそのような価値体系が存在していなかったとはいえないだろう。

また、京都の庭園の写真が少なかった理由として、もう一つの可能性を示しておきたい。それは、コンドルが庭園論を執筆した1893年当時の京都の庭園の保存状態の問題である。コンドルは、相阿彌が多くの名園を京都に造ったとして、等持院や西芳寺、さらに龍安寺や清水寺などを挙げた上で、それらは破壊されたりまた放置されていると明言している。(Conder 1893, pp. 16-17) これらの諸庭園の作者が相阿彌であるというのはコンドルの執筆当時の理解であり、相阿彌説はその後修正されていくが、この一文からは、京都の庭園の写真が少ないのは、その多くが記録することができない状態、つまりは荒れた状態であったという可能性が高い。さらにこれを裏付ける史料として、小澤圭次郎の「明治庭園記」がある。美術雑誌『国華』に小澤は「苑々源流考」という庭園に関する論考を連載していたが、それをまとめて大正に出版したのが「明治庭園記」である。この中で小澤は、九鬼隆一と岡倉天心が秋里の『都林泉名勝図絵』をもって視察にきたものの、かれらは京都の庭園をみて「言語に絶する状態である」と述べたと報告している。(小澤 1915, pp278-280)

さらに、コンドルは相阿彌を日本の庭園史において重要な人物として紹介した上で、龍安寺庭園が相阿彌の簡素さを好むスタイルをもっとも表す例であると述べている。(Conder 1893, p. 17) コンドルはこの他にも、西芳寺や銀閣寺の庭園についてもその作者が相阿彌であるという見解を示している。先述のように今日では、相阿彌はこれらの作者ではないとされているが、この一文からは、龍安寺をはじめとする京都の庭園について、特筆に値するという判断をコンドルが下していたとみなすことができるだろう。このように、図版が少ないことから、コンドルや同時代の価値観が京都の庭園を重要とみなしていなかったとは言い難い。

(2) コンドルの庭園論の三つの本質について

第二に、コンドルの庭園論には三つの本質があるとまとめられた点についてコメントを申し上げたい。渡辺先生は、コンドルが庭園を風景の表象であると捉えていたこと、そして庭園を美術として捉えていたこと、さらに精神性に対する言及が少ないことの三点をコ

ンドルの日本庭園論の本質とし挙げられた。これらの三つの特徴は確かに認められるところであり、コンドルの建築観や特性とともに読み解かれた点は興味深い。以下では、精神性への言及が少ないという渡辺先生のご指摘に、補足とさらなる問題提起を試みたい。

精神性に対する言及について、渡辺先生が引用された箇所をみると、確かに先生の指摘のとおりコンドルはあまり重要とみなしていなかったと考えられる。しかしこの文を和訳してみると、結果的にはコンドルの思想への関心の低さを裏付けることになるかもしれないが、興味深いことが示唆されている。そこで、この引用についてももう少し掘り下げて検証してみたい。コンドルは庭に表現されるセンチメントとして、「隠逸、長寿、幸福、謙譲、忠誠、安逸、品格と高潔、良縁そして老境」を挙げている。これらの語をみても、「隠逸」から「老境」までは、道教を、そして「忠誠」から「良縁」までは儒教をというように、いずれも中国の思想を想起させる言葉が並んでいることに気づく。この典拠の特定は困難だが、ここから推察できるのは二つの可能性である。一つは、17～18世紀に欧米で流行したシノワズリーをうけて、中国庭園の思想的背景としてイギリスでコンドルがこれらの知識を得たという可能性である。もう一つは、道教と儒教が混合された形で中国思想として江戸期の書物で紹介され、それらをコンドルが日本国内で参照したという可能性である。

これら二つの可能性について明らかにすることは今後の課題であるが、それと同様にここで重要なのは、造形上は明確に区分されていた日本庭園と中国庭園は、思想に対する理解においては未分化の状態であったという点である。日本庭園の造形に対する理解と思想に対する理解のタイム・ラグが生じていたというのが、このコンドルの一文からは読み取れるのである。こうした造形と思想の関係性については、庭園だけでなく他の工芸においてもどのような展開をみせたのかについてという問題は議論するに値するのではないかと提起したい。

(3) コンドルの史的・文化的要素の理解について

最後に、コンドルが日本庭園の史的・文化的要素をないがしろにしているという渡辺先生の論点について触れたい。コンドルは *Landscape Gardening in Japan* を著す以前に、その基となる *The Art of the Landscape Gardening in Japan* という論文をまとめている。著書と論文の大きな変化の一つとしてもっとも顕著なのが、歴史に関する位置づけである。論文では足利時代について一節を割いているにすぎない日本庭園の歴史が、著書では第一章に *History* として設けられ、論文に比して多くの頁が割かれているのである。この変化の契機となったのが、コンドルの論文の3年後に著された横井時冬の『園芸考』(1889)と考えられる。コンドルは横井の『園芸考』を *Landscape Gardening in Japan* の参考文献として挙げているが、『園芸考』の最大の特徴とは、日本の庭園を日本史に沿って歴史的に叙述したという点であろう。横井は、「檀原朝から奈良」、「平安から鎌倉」、「足利時代」、「織田から徳川」、「維新以後」という日本全体の歴史を下地とした五つの時代区分を提示し、その流れに沿って庭園の変遷をみるという視点を提示した。こうした横井の方法は、庭園の史的由来や起源の重要性を示唆し、庭園の伝統性の確立を目指す姿勢が映し出されている。日本の国史に則するという『園芸考』の庭園史観の影響は、コンドルの *Landscape*

Gardening in Japan にも認められる。コンドルは『園芸考』を参照しつつ、龍安寺や銀閣寺、そして清水寺や吹上苑などの沿革を紹介し、さらに相阿彌や千利休、小堀遠州といった茶人たちを作庭に携わったとして具体的に列挙し解説している。コンドルは明治期以降に造られた庭園については歴史の章では扱わず、さらにインドで発祥した仏教が中国を經由して日本に影響を及ぼしたと論じるなど横井との違いもみせているが、庭園や茶人たちを時系列に紹介し、多くの紙面を割いている点には横井の歴史観が反映されているといっている。以上のように、コンドルは横井を下敷きにしながら歴史について一章を割いており、このことからコンドルが歴史性を日本庭園理解に必要な要素としてみなしていたといえるだろう。

以上、交流史的な観点からコメントを申し上げてきたが、イギリスでのジャポニスム受容を中心とした美術史研究の渡辺先生からのご意見をいただければ幸いである。さらに今後、コンドルの庭園論に様々な方向から検討を加えていくことができれば、欧米における日本伝統工芸と美術の受容の位相を明らかにすることに繋がっていくだろう。

参考文献

秋里籬島 『都林泉名勝図絵』、1799年、本コメントは上原敬二編『都林泉名勝図絵』、[復刻版] 造園古書叢書、加島書店、1985年を参照した。

小澤圭次郎 「明治庭園記」、明治園芸研究会編『明治園芸史』、1915年

横井時冬 『園芸考』、大八洲学会、1889年

Conder, Josiah, "The Art of the Landscape Gardening in Japan," *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 14 (1886), pp. 119-175

————— *Landscape Gardening in Japan*. Kelly and Walsh, 1893.

————— *Supplement to Landscape Gardening in Japan*, with collotypes by K. Ogawa. Kelly and Walsh, 1893.